二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
小説
酒井仁
表紙イラスト
なえなえ
俺のハーレムのヒロインは
全員
なぜか
都市伝説
としでんせつ
のようです

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『俺のハーレムのヒロインはなぜか全員都市伝説のようです』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

俺のハーレムのヒロインは
なぜか全員
都市伝説
としでんせつ
のようです
酒井仁
表紙イラスト／なえなえ
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

不破九郎（ふわくろう）

小中高と男子校で過ごしてきた大学生。女の子にモテまくるため、お百度参りをやり遂げる。

浜村佐奈子（はまむらさなこ）

モニターやスマホなどの画面から現れ、一度見ると一週間以内に死ぬという呪いをかけてくる黒髪ロングの少女。

沙希（さき）

かつて彼氏のために行った整形手術が失敗したため、常に大きなマスクで顔を隠している女性。

水野（みずの）カケル

高速道路を時速一〇〇キロ以上で走る女子校生の幽霊。健康で快活な性格。

フォークロアの壱「見ると死ぬ系の彼女　前編」

俺の名前は不破九郎、この春、大学生になったばかりだ。

家長である父親の方針で幼小中高とずぅ〜〜〜っと「男子校」で育ってきた俺にとって、男女共学の大学生活はまさにバラ色になるはず……と期待していた。

だがしかし。

生まれてこの方、母親以外の女性とろくに話したことのない俺にとって、大学デビューはハードルが高すぎた。案の定、新歓コンパでも女子とほとんど話すこともできず、「無愛想でなんか怖い奴」というレッテルを貼られてしまった。現在のところ、学内の知り合いはゼミの高沼先輩（もちろん男だ）だけという有様だった。

そんな時、俺は先輩から「どんな願いもかなえてくれる神社」の噂を聞いた。

願いを強く念じながら雨の日も風の日も欠かすことなく、一〇〇日間日参すれば霊験あらたか、社の神様がどんな願いもかなえてくれるという。

「で、お前は何を願うんだよ」

「もちろん素敵な彼女ができますように！　ですよ!!」

そして今日がいよいよ一〇〇日目。俺は神様に失礼のないよう、日の出前に家を出て早朝にお参りすることにしている。その日も朝もやのかかる中、俺はお賽銭をあげ、神様に

強く願いを訴えた。

（神様お願いです、せめて女の子との出会いを……素敵な彼女と出会えますように）

ぴろん、ぴろりろりん。

と、ポケットの中でスマートフォンが鳴った。しかもいまのは何かをダウンロードした音じゃないか。入れっぱなしで操作をした覚えはないのだが……取り出してみると、見覚えのないアイコンが映っていた。

「動画アプリ？　いつの間にこんなのＤＬしたんだ？」

俺はそれほどＳＮＳやゲームにハマっているわけではない。だからその時もなんの気なしにその動画を起動させてしまったのだ。

ざざっ。

画面が不自然に歪み、ノイズが走った。次の瞬間、画面が妖しく光り始め、俺は思わずスマホをとりおとしてしまった。スマホはかしゃんと玉砂利の上に落ち、偶然にも画面が俺の方を向いて斜めに立った。

ざざっ、ざ――――――――薄暗い画面の中に、ある風景が映っている。

ちょうどこの神社そっくりの境内に、一人の女性が佇んでいた。ゆったりした白いワンピースに腰まで伸びた黒髪が顔を覆っていて、表情はおろか目も見えない。両手をだらりと体の前に垂らし、少し猫背気味だが、すらりと背が高い。

彼女は一歩、また一歩とこちらに近づいてくる。黒髪が右に左に揺れるが、やはり顔は見えない。画面は彼女の顔にクローズアップしていき、画面のほとんどが黒髪で覆われたかと思った次の瞬間、囁くような、掠れたような「声」が聞こえたのだ。

「一週間後の今日――――――あなたは死にます」

ざざっ、ぶつんっ。

画面に光が走ると同時に、彼女の姿は消えてしまった。

俺は慌ててスマホを拾い上げて起動するが、通常画面に戻っている。動画アプリのアイコンは残っていたが、何度タップしても起動しない。

俺は呆然と立ち尽くし、たったいま起こったことに衝撃を受けていた。そして唇を震わせながら、かろうじてこう呟いた。

「――――――――で――――出会い系……ッッッ……！」

「お前……それやばいんじゃねえの？」

俺の話を聞いた高沼先輩は、声を潜めて言った。

「何がですか、羨ましいんですか先輩。俺が見事祈願成就して、黒髪美人とお知り合いになれたからって、嫉妬は見苦しいですよ」

「ちげぇーよ！　お前の話を総合するに、その女確実にヤバイだろ！　俺も噂でしか聞いたことないけど、それ明らかに『見たら死ぬ系の動画』とかそういうのだろ！」

ふむ、どうやら嫉妬ではないようだ。というのも、この先輩は筋金入りのガチのロリコンで、中学生以上の女をＢＢＡと言いきって憚ることのない困った人だからだ。ただし、実際に幼女に手を出すようなことはしない人だが。

ゆったりした服で体型こそわからなかったが、彼女は先輩にとっては対象外だろう。

「だいたい髪で顔が見えないんじゃ、美女だともわからんだろう」

「うっ、それはたしかに。いいや、きっと美人ですよ！」

とはいえ、あれきりアプリは何度やっても起動せず、彼女とどうやって再会すればいいのかわからない。スマホに詳しい奴に解析してもらえないかと先輩に頼み、その日は安アパートに帰ることにした。

ごろりと寝転がってスマホを眺めていると、あの時見た黒髪が思い出された。

（俺……女の子に話しかけられたなんて、あれが初めてだったんじゃないか？　コンパでも講義でも誰も話しかけてくれないし、そもそも俺って女子の前だと緊張してしどろもどろになるもんなぁ。あぁっ、もうこれきりあの娘に会えなかったらどうしよう！　もう一度……もう一度会いたいッッ）

そんなことを考えながらスマホに手を当てた時だった。モニターが波打ったように感じ

た瞬間、俺の手がモニターに「ずぶぶっ」と沈んだのだ。
「うわぁああっ？」
これにはさすがに驚いた。肘の辺りまで腕がスマホに入りこんで、もちろん反対側はなんともなってないのだ。うろたえながら腕を滅茶苦茶に動かしていると、偶然にも俺の手が柔らかな何かをむんずと掴んだ。
「な、なんだ、この柔らかくて暖かい……」
「きゃぁあああ〜〜〜〜っっっ！」
耳をつんざく女の悲鳴がスマホから鳴り響いた。驚いた拍子に尻もちをつくと、手に謎の肉まんじゅうを掴んだまま「ずるりっ」と俺の手がスマホから引っこ抜けた。
「きゃぁああんっ」
ずるるるっ、と小さな画面から黒髪の女の子の上半身が現れ、俺は胆をつぶす。
どういう仕掛けになっているのか、手のひらサイズの液晶画面から、白いワンピースに黒髪の女の子が畳に突っ伏してあわあわしている。どうやら、俺は偶然にも彼女の胸を鷲掴みにしていたらしい。
（だっ、第一次おっぱい接近遭遇ッッッ！）
すらりとした見た目とは裏腹に、彼女は意外や巨乳だった。初めて触れた女の子のおっぱいが巨乳とは、いよいよご利益さまさまだ。いまはうつ伏せになっているが、やはり畳

に押しつぶされて変形しているのだろうか、嗚呼(ああ)俺は畳になりたい。
「き、キミ！　だ、大丈夫かい、あ、あの、昨日神社で俺と会ったよね？　話しかけてくれたよね、覚えてる？」
「あ……あの、わ、私、こ、こ、こんなこと初めてで、あのその」
相変わらず髪に隠れて顔は見えないが、ちらりと見えた頬は真っ赤に染まっているようだ。そのうろたえぶりすら可愛いと俺は思った。
「お、俺は不破九郎っていいます！　大学生です！　お、お名前を教えてくれませんか、できればお友だちからお願いします！」
うぉおおお、言った、言えたぞ、男らしく、かと言って乱暴ではなくはきはきと健康的に、まずは友だちからだ。いままで何百回と頭の中でシミュレートしてきた甲斐があったぜ。
だが、彼女は差し出した俺の手を取るでもなく、上半身だけをスマホから出した格好できょろきょろしている。
「あ、あのぅ……」
「はいっ、不破です！　血液型はA、牡牛座です！」
「いえ、その、昨日のって……私、あなたに言いましたよね？　一週間後に死にますって」
「そうですね！　キミは占いか何かをするの？　でも大丈夫、俺はそういうの気にしない

から！　人間、死ぬ時は死ぬ、死なない時は死なない！」
　俺の爽やかトークになぜか眉間を押さえる彼女。
「いえ、死ぬんですよあなた……私は、そういう呪いですから」
「でもなんで一週間もかかるの？　あっ、ちょっと待って、呪いだから！　呪いだけに、効果が出るのが鈍い！　なんつってなんつって」
「……帰ります」
「あっあっいまのなし、いまのなし！　呪いなんですね、俺はあと六日で死ぬんですね、オーケーオーケーまるっと理解しました。だから、キミの名前を」
　いかん、会話が弾みすぎてテンションがやばいくらい上がっている。すると彼女は何かいろいろ諦めたように肩を落とすと、囁くような声で「浜村佐奈子」と名乗った。よし、女子の名前初ゲットだぜ。
「じゃあ、そういうことですんで、来週また来ます……」
　そう言ってずずず……とスマホに戻りかける彼女を、俺は慌てて呼び止める。せっかく名前まで聞き出したのに、お預けを食うなんてまっぴらだ。
「ねえ、明日また会えないかな？　ちょうど講義も休講だし、俺、佐奈子ちゃんのこともっとよく知りたいんだ！」
「えっ……」

俺の言葉に彼女はきょとんとして振り返る。もっとも、顔は髪で隠れているが。
「あと六日、あと六日の間に俺はその呪いを打ち破ってみせる！　もしそれができれば、俺の彼女になって下さい」
「そ、そんな約束できません。っていうか、呪いを打ち破るなんて無理だから」
彼女は突然の告白に驚きうろたえているようだ。それはそうだろう、昨日出会ったばかりの男に彼女になってくれだなんて、即答できるはずもない。
だが時間はまだある。
せっかく神社のご利益で知り合えたのだ、あとは俺自身の努力でこの出会いを恋に育んでみせるだけだ。俺は死中に活を求める思いで右手を差し出す。
「キミがなんで俺を呪ったりしたのか、俺にはわからない。わからないから知りたい。そして、俺のことも佐奈子ちゃんに知って欲しい。俺が呪い殺さなきゃいけない男だっていうなら、そうしてくれて構わない。けど、そうじゃないって思ったら……」
「だから、そういう種類の呪いじゃないから……」
「……」
俺は右手を差し出したまま、まっすぐに彼女を見つめる。
顔を覆い隠す長い黒髪を透視する勢いで視線をまっすぐぶつけ、彼女の返答を待っていると、彼女は小さな白い手をおずおずと差し出してきた。そしてまだ少し迷いを残した手

つきながら、そっと俺の手を握り締めたのだ。

（氷みたいに冷たい手だ。でも、これが女の子の手……！）

女の子の手の感触に感動していると、彼女は俺の手を放す。そしてスマホの小さな画面の中に「ずずずず……」と帰っていった。やがて黒髪が完全に画面に沈んでいくと、昨日見たあの風景の中に佐奈子ちゃんが佇んでいた。

「佐奈子ちゃん！　また明日、俺迎えに行くよ！」

聞こえるかどうかはわからないが、俺はスマホに話しかけた。すると画面の中の彼女はためらいがちに振り向いてくれた。やっぱり顔は髪の毛で見えなかったけれど、俺は彼女がはにかんでいるように感じた。

ざざっ、ぶつんっ。

画面が乱れると同時に暗転し、スマホは通常画面に戻ってしまった。

彼女の姿が消えてしまうと、いま会ったことがまるで夢か幻のように感じられる。俺の腕がスマホの中にずぶずぶ沈み、おっぱいを掴んだかと思うと液晶から佐奈子ちゃんの上半身が飛び出してきて……。

でも、あの胸の感触と、彼女と手をつないだ感触はまだ残っている。特にあのふかふかのおっぱいの柔らかさときたら。

「い、いかんっ。この感触が残っているうちに！」

俺はスマホを机に伏せておくと、いそいそと自家発電の準備を始める。あの巨乳の感触が残っているうちに、「おかず」にしなければ勿体ないではないか。

「はぁ、はぁ、佐奈子ちゃん……あの子が俺の彼女になってくれたら、おっぱいだけじゃなくあんなところやこんなところも……いやいや、それより先にまずはキッスを」

それにしても、今日は本当に驚かされてばかりだ、と俺は我が愚息をしごきながら、思わず呟いていた。

「女の人が末端冷え性っていうのは本当だったんだなぁ。まさか手のひらがあんなに冷たいだなんて驚きだよ」

初めて触れた、母親以外の女性の神秘に俺は感心しきりだった。

明日が楽しみでしょうがないぜ。

フォークロアの弐「見ると死ぬ系の彼女　後編」

ざわ……ざわ……キャンパスを行きかう学生たちが、俺と彼女に熱い視線を浴びせている。無理もない。学内でも気軽に話せる相手はガチロリコンの高沼先輩しかいないこの俺が、黒髪ロングヘアの美女と手をつないで、仲睦まじく歩いているのだから。

「お、おいあれ……」

「あのざんばら髪に白のワンピースって、例の噂の……」
「い、いやコスプレだろ。でなきゃヤバすぎるって」
あの日――神社に一〇〇日願かけした俺の前に突如現れた「浜村佐奈子」ちゃん。スマートフォンから現れるという不思議系美少女と、俺は連日デートを重ねていた。
「あ、あの……」
おずおずと話しかける彼女の素顔を、俺はまだはっきりと見たことがない。腰まで届く長い黒髪のため、顔が隠れて見えないのだ。だがそんな奥ゆかしいところも、昨今の派手派手イケイケな女と違って好ましい。
「ん、どうしたの佐奈子ちゃん」
「なんだか……すごく見られてる気がするんですけど……私、あまり人目に晒されることに慣れてなくて」
「……ハッ！　ご、ごめん気がつかなくて。つい佐奈子ちゃんのことみんなに見せびらかしたくて、でも迷惑だよね。ごめん、場所を変えよう」
ああ、俺はなんて自分勝手な男だ。彼女のことも考えずに連れ回して、まだ交際してるわけでもないのに。俺は彼女の手を引いて、すぐに人目につかない場所に移動した。
「はい、飲み物。ロイヤルミルクティーでよかったのかな」
「あ、どうも……甘くておいしい……」

彼女と出会ってもう六日目。この一週間は夢のような日々だった。佐奈子ちゃんが言うには俺はあと一日で呪いで死ぬらしいんだが、特に体の不調は感じない。むしろ、毎日女の子とデートできる嬉しさで、いまならどんな国際紛争でも解決できる勢いだ。

それに、心なしか彼女も俺と一緒にいる状況に慣れてきて、リラックスできているような気がする。俺のすぐ隣でベンチに座った彼女の猫背を眺めていると、つくづくあの神社のご利益に感謝せずにはいられない。

「今日はもう講義もないし、お、俺んち寄っていかない？」

「……は、はい……」

そう、連日のアタックが功を奏したのか、彼女は俺の部屋で二人きりになるまでの仲になっていた。彼女もこうして衆目に晒されるよりは、俺と一つ部屋にいた方が落ち着くらしい。これはもう交際、いや同棲しているも同然ではないだろうか。

（き、今日こそは男女の一線を越えてしまいたい！）

だが強引に迫って嫌われたら元も子もない。ここはじっくりムードを盛り上げるべきだと考え、俺は帰る途中でケーキを買って彼女とアパートに戻った。

「あの……毎日いいんですか、こんなケーキまで買わせてしまって」

「もちろんさ、佐奈子ちゃんケーキとかあまり食べたことないって言うから、振る舞い甲斐があるよ。遠慮しないで食べてよ」

うちにはソファなんて気の利いたものがないので、ベッドに並んで座る。
彼女はイチゴのショートケーキを小さく切り分け、髪の間からスポンジを差し込む。ちら、と見える鼻筋がぞくりとするほど色っぽくて、俺の鼓動が高鳴る。俺は彼女の肩に手を回して抱き寄せた。長い黒髪を撫で下ろし、そろそろと後ろから胸の膨らみに手を伸ばすと、彼女はそっと俺に身を預けてきた。
（こういうスキンシップにもかなり慣れてきたみたいだな。おっぱいがたゆんたゆんと揺れてたまらないぜ）
佐奈子ちゃんがノーブラ派だと知ってから、俺はとにかくおっぱいを中心に攻める。右手で乳房をやわやわと揉みつつ、左手を彼女の太ももに乗せ、ゆっくりと撫でる。ワンピースの上からでも太ももの柔らかさが伝わってきて、ズボンの中のイチモツがむくむく膨張していくのがわかる。
（今日こそは、キスまでこぎつけられるか……？）
黒髪からかすかに覗く耳に唇を寄せ、「佐奈子ちゃん」と囁くと、彼女はびくりと身を震わせて顔を背けてしまう。だが、その日の佐奈子ちゃんはいつもと違った。なんと髪をそっとかきあげて口元を覗かせると、細い腕を俺の股間に伸ばしてきたのだ。
「さ、佐奈子ちゃん？」
骨ばった指が巧みにジッパーを下ろして俺のモノを取り出した。ぶるんと飛び出した勃

起ペニスにひやりとした指を絡ませると、彼女はイチモツをぱくりとくわえこんだのだ。
「うぉ……お……っ」
口の中なのに、なぜかどこかひんやりとしている。でもぬめぬめと唾液が絡みついて、そこに「ぬるんっ」と生温かい舌が亀頭を撫でるのがわかった。
じゅる……れろ、れるん……っ。
（おぉおおお、キスより前にまさかのフェラチオ！　そんなに顔を見られるのが嫌なのか、それとも意外とエッチな娘だったのか、佐奈子ちゃん？）
俺は彼女に失望するどころか、いきなりこんな大胆なことを仕掛けてくる少女に感動していた。それに、彼女の舌使いはどこかぎこちなく、慣れているようには見えない。でも、その一生懸命さが逆にそそる。
「んっ、れろ、じゅる……ど、どう、ですか……？」
「ああ、き、気持ちよすぎて、俺……うぁぁあっ」
俺の反応をうかがうためにちらりと顔を上げる彼女。黒髪の隙間から彼女の目が一瞬覗いたような気がして、俺の興奮は一気に高まった。
どぴゅっ。びゅる、びゅっ、びゅばぁあっっ。
「え……」
勢いよく噴出した俺の精液は放物線を描き、彼女の黒髪に降り注いだ。独特の臭気が立

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

ち上り、べっとりと白濁をへばりつかせた彼女はしばし呆然としている。
「うわぁあああっ。ご、ごめん佐奈子ちゃん！　あんまり気持ちよくて、俺」
「……」
彼女は俺のザーメンを拭いもせず、ゆらりと立ち上がった。
そしてふらふらと踵を返すと、テーブルに置いてあった俺のスマホに「す……」と手を伸ばす。触れてもいないのに液晶がざざっという音と共に光り、彼女の長身は手からするすると吸いこまれ、消えてしまったのだった。
次の日――――――。
俺は大学の講義を受けつつも、まったく講義内容が頭に入ってこなかった。
もちろん昨日のことを後悔しているのだ。せっかく佐奈子ちゃんが自分からフェラチオしてくれたというのに、俺はそんな健気な女の子の顔に（というか髪に）ザーメンをぶちまけてしまったのだ。
「ああ、もう彼女に合わせる顔がない……」
彼女と出会って今日で一週間目。呪い殺されたって構わないから、もう一度会ってくれないだろうか……ぼんやりそんなことを考えているうちに抗議は終わり、俺はふらふらと人気のない方に歩きだした。
いまは先輩にも会いたくない。誰も寄り付かない講義棟の屋上に向かった俺は、スマホ

を取り出してみた。俺はまだ彼女の素顔すら見ていないのだ。せめて姿だけでも……と液晶に触れた時だった。

ざざっ、ざ――――――――スマホの画面にあの風景が映し出され、画面中央に彼女がいた。

「佐奈子ちゃん！」

思わず呼びかけると、彼女はじり、じりとこちらに近づいてくる。

「佐奈子ちゃん、許してもらえるとは思わない。でも聞いてくれ！　俺はキミのことが」

す……と画面に指を押し当てると、彼女は無言のままワンピースの裾をゆっくりと持ち上げていく。白くて細い足が徐々に露わになっていき、とうとう下肢の付け根が丸見えになってしまう。その光景に俺は息を呑んだ。

「佐奈子ちゃん……ぱっ、ぱんつ穿いてない……ッッ」

浅ましいと思いつつ、俺は液晶に触れんばかりに顔を近づける。間違いない、蒼白い下腹部に黒いアンダーヘアが萌えている。

「私と……したいですか？」

「えっ！」

「不破さん……あなたは、今日死にます。私がこの画面から出ていってあなたをとり殺します。そちらに出ていったら……私と、エッチなことをしたいですか？」

どこか思い詰めたような彼女の声に、俺は戸惑う。まるで、彼女が「ここから出たくない」と言っているように感じたからだ。

だが、俺の答えは決まっている。

「したいっっっ！」

「……」

「俺は佐奈子ちゃんとエッチがしたいッ！　佐奈子ちゃんを力いっぱい抱きしめて、キスをして、佐奈子ちゃんの中に俺のナニをぶち込みたいッッ！」

いくら人気のない屋上とはいえ、誰に聞かれるかもわからないが、俺は懸命に訴えた。訴えて、そして勃起したイチモツを取り出した。彼女は黒髪の隙間からそれをちらりと見て、恥ずかしそうに顔を背ける。

「言っただろう、俺は呪いなんかに負けたりしない！　キミが好きだから、呪いなんか撃ち破ってやるぜ！」

「そんなこと……無理だって言ってるじゃないですか」

彼女はスカートをたくしあげたまま、画面に近づいてくる。顔が見えなくなり、白いワンピース、そしてアンダーヘアを晒した下腹部がどんどん液晶に迫ってくる。

画面が彼女のデルタ地帯でいっぱいになったところで、俺は液晶に口付けをした。一瞬、画面が波打ったように揺らいだかと思うと、ふわりと甘い女の子の香りが鼻孔を抜け、そ

して唇にじょりっと「毛」の感触が感じられた。
（あの時、俺の腕が画面に沈んだ時と同じだ……！）
ということは、俺はいま佐奈子ちゃんの股間に顔を押し当てているのか。興奮のあまり「ふぉおおおお」とおかしな声を出してしまうと、頭の上から「あ、んっ」と鼻にかかったような声が漏れ聞こえた。
思い切って俺は舌を突き出した。舌先で陰毛をかき分けるように潜らせると、なんだかむっと生温かい空気と、潮のような香りがする。俺は無我夢中で彼女の下肢の付け根をれろれろとねぶりまくった。
「んぅうっ！　ん、あ、うぅんっ」
彼女の声はますます色っぽく、それと共に舌先に「ぬるっ」としたぬめりとしょっぱい味を感じた。はたから見るとスマホに顔を押し付けた不審者だが、俺はいままさに女の子の股間を舐めまわしているのだ。
「あっ、だめ……！」
その時不意に彼女が腰を引いたので、俺も思わず顔を離してしまった。液晶画面に映っていたデルタ地帯が消え、画面は真っ白だ。しまった、やりすぎたかと思っていると、さらに衝撃的なものが液晶いっぱいに広がった。
「こっ！　こ、これは、し、尻の穴……ということは、その下にあるのはッッ」

どういう仕組みになっているのかはわからないが、こちらの世界とあちらの世界をつなぐ液晶画面に、佐奈子ちゃんの尻が押し付けられていた。ちょうど後ろを向いてお尻を突き出した格好……とでも言うのだろうか、可愛くすぼまったピンク色の尻穴の下に、薄紅色にぬめった貝の身のような肉襞が映っている。

「こ、これが女の子のアソコ……佐奈子ちゃんの、おま○こ……！」

彼女の意図に気付いた俺は、スマホの画面を自分の股間に持っていく。みりみりといきり立った先端をそっと液晶画面に近づけると、液晶は波打つと共にずぶずぶと俺のモノを呑み込んでいく。

「あ……あったかい！　それにぬるぬるして、うあぁあっ」

「ひゃうぅうっっ」

彼女が甘い声を漏らすと同時に、ま○この肉がきゅううっと俺のモノを締め付ける。

俺はその心地よさに堪えきれず、さらにスマホを下腹部に押し付ける。挿入が一気に深まり、俺の肉棒は根元まで彼女の中に突き入れられてしまった。

「ひ……う、くぅ……っ。お、お腹、裂けちゃう……」

挿入しているだけだというのに、彼女の中はうねうねとうねり、ペニスに絡みついてくる。奥からはお湯のような体液がじゅわりと溢れ、陰茎を包み込む。

（俺はいま、佐奈子ちゃんとセックスしてるんだ、ま○こにちんぽを突っ込んでるんだ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/